

既には夕闇に包まれていた。

針を抜き取られ、性器を縫った糸を解かれたとは言え、乳房と股間の傷口に鈍く疼くような痛みを感じながら、麻美は平尾と美佐子の間に挟まれるようにして、ホテルの駐車場に止められた車に向かって歩いていく。

肌を冷やす夜風が、紺色のスカートからパンティを着けていない股間に吹き込み、頼りな気な感覚に捕われる。

麻美が車に乗り込む寸前、振り返った。その目は、先程まで自分が居たホテルの部屋の窓に向けられている。

あの部屋の中で、わたしは全てを失ってしまった……。

もう今のわたしは、以前のわたしではない。縛り上げられ、淫らな道具で処女を奪われ、決して他人には見られたくない恥辱の姿を撮影までされ、そしてお尻の内に男の精を注ぎ込まれてしまった、わたしは、もう……。

でも……でも、わたしはその事に快感を感じてしまっていた。イヤらしい道具で罵られた股間を、淫らに濡らしてしまった。そして、お尻の穴に「男」を突き入れられ、その味わいを教え込まれてしまった……。

なんという変化だろう。ほんの数時間前の、まだ空が明るかった頃ならば、わたしは、身体を罵られ、お尻を犯されてまで女は快楽を味わう事が出来るのだと言う話を聞いたとしても絶対に信じなかつただろう。そんな事などは自分とは関係のない、別の世界の事だと、断言しただろう。でも今は……。

麻美は以前に読んだ事のある、カトリック教に関する訳本に書かれていた一節を思い返す。

煉獄

——死者の霊が天国にはいる前に炎によって清められる場所——

わたしにとって、あのホテルの部屋は、その煉獄だったのだろうか？ いや、わたしのこれから向かう「場所」は決して「天国」ではないだろう……。では「地獄」なのか？ 多分そうなのだろう。

でもそこは、もしかしたら甘美で、蠱惑的な「場所」なのかも知れない……。瞳から知らず知らずのうちに涙が零れ落ち、彼女の視野が滲んだ。

\*

「言わなくても、解っているだろうが——」

平尾が、助手席に座った麻美に話し掛けたのは、彼女の自宅まで、あと十分程の距離に三人が乗る車がさしかかった時だった。

「はい……。解っています。今日の事は決して、人には……」

麻美が小声で答える。

「それだけじゃないわよ」

後ろの席の美佐子が、座席越しに振り返ってきた。

「あなたはもう、私達のペットなのよ、私達が好む時に好きなようにいたぶれる。ペットなのよ。ふふつ……。それをよく覚えておくことね」

麻美が深くうつむき、唇を噛み、囁くような声で答える。

「はい……」

そんな彼女の姿を見て、ハンドルを握る平尾が満足げな微笑みを浮かべた。

「ずいふんとすなおになったものだな……」

平尾がバックミラーにちらりと視線を向けてから、ハンドルを大きく切る。カーブした車が反対車線を越えて横道に進入し、ひとけのない道の端に停まった。

「どうしたの、止めたりして？」

美佐子が怪訝な表情を浮かべた。

「いや、オレ達の可愛いペットが素直になったようなのでね、ご褒美を上げようかと思ったんだよ」

美佐子が、平尾の言葉に含まれた陰媚な調子を嗅ぎ取る。

「ふーん、どんなご褒美かしらね。楽しみよね、麻美」

麻美の不安げな視線を受けながら、平尾が上着のポケットから、バイブレーターを取り出す。

「見覚えがあるだろう？ 麻美。こいつは、お前が処女を捧げた相手だよ、お前のあそこに突っ込んでやった尻の穴用のバイブだよ。今日の記念にな、道具を返しにいった時に、もらって来てやったんだ」

麻美が平尾の手に握られた、黒い陰具を見詰める。そのゴム製の陰具は、あらためて見ると、ぞっとする程に淫らな形状をしていた。

平尾が、陰具の尻から伸びたコードに続くスイッチボックスを手に握ったまま、本体を麻美に

差し出す。

「ほら、受け取れよ」

麻美が恐々にその陰具を受け取る。

「お礼はどうしたの？」

美佐子の言葉に、麻美が囁く。

「……ありがとうございます……」

ふっと笑った平尾が、急に陰具のスイッチを最強に入れるた

静かな車内では異様な程に大きく響くモーターの音がたち、麻美の手の中で陰具が細かく振動しながら、亀頭の部分を淫らにくねらせはじめた。

その動きに驚いた麻美が、手の中から落ちそうになる陰具を握り締める。

「どうした、早くプレゼントをしまえよ」

平尾が命じる。

麻美が困った表情を浮べる。

「鞆を返して下さい……」

平尾が芝居かがった仕草で、足元に置いた通学鞆をチラリと視線を向けてから、彼女に視線を戻す。

「どうして鞆がいるんだ？」

「えっ？ いただいた……プ、プレゼントをしまおうかって……」

平尾がニヤリと笑う。

「誰が鞆にしまえと言った？ フフ……他の場所があるだろうが、お前の股の付根にな」

「そ、そんな……」

麻美が掠れた声で囁く。

うなだれる彼女に、美佐子が後ろの座席から追撃ちをかける。

「ほらほら、どうしたのよ、せっかくのプレゼントじゃない」

平尾が車内灯を点ける。

「さあ、はじめな」

麻美は表情を固く強ばらせたまま、シートに座り続ける。

そのシートに平尾が手を伸ばし、リクライニングレバーを操作した。シートの背凭れが大きく後ろに倒れ、音を立てる。

「オレは命令したんだぞ、麻美。なんなら、スカートをひん剥いて、尻を丸出しにして車の外に放り出してやろうか」

平尾が麻美の瞳を見詰めながら笑う。

その平尾の瞳を彼女が見返す。この男なら、本当にやるかもしれない……。麻美が顔を上げる。

薄暗く、黄色味があった光に照らしたされる狭い車内。強制されたとはいえ、これから自分の手で行わなければいけない痴態を思い、恥辱に耐える麻美。そして彼女を見詰める平尾と美佐子の瞳。車内の空気に淫らな欲情の匂いが香る。

麻美が思い切ったかのように、シートの上に脚を持ち上げ、膝立ちになる。

「やっと始める気になったのね、のろい娘ね、お前は」

囁いた美佐子の声は、その言葉とは裏腹に昂ぶりを内包したものだだった。

バイブレーターの上げるモーターの音が車内に響く。

麻美がゆつくりと、紺色のスカートをめくり上げはじめた。

車内灯の為に、黄色っぽく見える太股があらわれ、その付け根に薄い陰毛の翳りが現れる。

彼女の股間の奥の、閉じた肉襞の狭間には、生理の血を微かに吸った白いテッシュが挟み込まれていた。

美佐子が後ろの座席から身体を伸ばし、麻美の股間を見詰める。

「濡らしてないかい？ 麻美」

「ハハッ、分からんぜ、こいつは初めて尻をヤラれてヌルヌルに濡らした女だからな」

麻美が悔しげに唇を噛む。

「手伝ってやるよ」

平尾が彼女の股間に手を伸ばし、肉襞からはみ出しているテッシュの端をつまみ、ゆつくりと引き出しにかかる。

三分の一ばかりが経血で汚れたテッシュが、二枚の肉襞をめくり上げるようにして引きずりだされてくる。

平尾がそのテッシュをしばしばと見詰め、その自分の姿を麻美に見せ付ける。

「どうやら濡らしていないようだな。やっぱりいたぶられないと燃えないらしいな、お前は」

平尾が薄く笑い、テッシュを座席の下に置かれたゴミ箱に棄てる。

「ほら、もう邪魔なものは取ってもらったでしょ、早くプレゼントをお前のイヤらしいアソコ中にしまうのよ」

美佐子に急かされた麻美が、淫らにくねる陰具の先端を性器に触れさせた後、受け入れやすいように膝を左右にすべらせ、股を大きく開く。

平尾がそんな彼女の姿を舌なめずりするような顔で見詰める。

麻美の陰具を持った手が、わずかに上に動き、その顔がしかめられた。くねりとともに、陰具の亀頭が性器の肉襞をこね回し、その奥の粘膜を刺激する。

麻美が眉間に寄せた皺を深くして、更に陰具を押し上げるが、バイブレーターは悪戯に性器の表面でくねり続けるばかりであった。

「止めて、お願い、くねるのを止めて下さい。は、入らないの……」

麻美が平尾に哀願する。

「入るさ、お前のあそこが濡れたらな」

麻美が唇を噛み、瞳を閉じる。

「そんな……」

その途端、平尾の平手が、彼女の頬に飛んだ。

「目を開ける、オレを見るんだよ。オレを見詰めながら自分の手で、自分の股間を濡らして見せるんだよ！」

麻美が泣き出しそうな瞳を平尾に向ける。

麻美が空いた片方の手を股間に持つていき、人差指の腹で陰核に軽く触れ、そこを愛撫しはじめた。

そんな彼女の様子を見る美佐子が、からかうような調子で言う。

「あなたオナニーの時、そうしてヤッているのね。いつもの習慣がよくわかるわ」  
続けて、美佐子が麻美の股間に手を伸ばす。

「あつ、嫌！ 何を？」

脅えを含んだ驚きの声を上げた麻美に、美佐子の微笑みが深まる。

「手伝ってあげるのよ。他人にされた方が感じるでしょう」

美佐子が、陰核を包皮ごと親指と人差指で摘まみ上げ、柔らかく揉み込むように動かし始める。

「あつ……！」

麻美が喉を小さく鳴らす。その声にははっきりと快感の調子が混じっており、捲ったスカートの中で腰がピクリと動いた。

「フフツ……。どう？ こうされると、気持ちイイんでしょう？」

美佐子が彼女の耳に息を吹き込む。

「は……はい……」

麻美が囁く。

すっかり素直になった彼女に冷笑を向けた美佐子が、陰核を摘まんだ指の動きを大きくする。

「ああつー！」

「ほら、バイブを動かすのよ、もっと気持ちヨクなれるわ……。そして空いている手でお乳を揉むのよ」

麻美が、美佐子の言葉通りに陰核を愛撫していた手を制服の中に差し入れ、ブラウスの上から

乳房を掴む。陰具を持つ手が前後に動きだし、性器の奥の肉穴の表面をこすりはじめる。

バイブレーターの振動が、膣口周囲の薄い秘肉を微かに震わせる。

「イインでしょう?」

「……う、うん……。イイです、気持ち、イイ……」

美佐子が囁き声で問い、麻美がうわ言のように答える。

「どこが?」

「……今、触られている……ところが……」

「どこか言うのよ」

「……ク、クリトリス……が……。クリトリスが気持ちイイの……。ああ……」

「ほらほら、あなたそこ、とつても固くなってきたわよ」

美佐子が、指で挟み込んでいる陰核を強く刺激する。

麻美が悲鳴のような喘ぎ声を上げ、性器をこすっている陰具の、黒い表面に愛液のぬめりが光る。感じた快樂に彼女が、半ば本能的に陰具を押し上げ、膣口に埋めていく。

「まだダメよっ!」美佐子が彼女の手を止める。

「本当に我慢の出来ないイヤラシイ娘ね、お前は。入れる時はお願いしなさいよ。私達に、入れさせて下さいって、お願いするのよ」

陰具の上で麻美の愛液が糸を引き、膣穴から溢れ出した雌の匂いが車内に香る。

既に快樂に頬を高潮させている麻美が、もどかしげに身をよじらせ、強く乳房を握り締める。

「……い、入れさせて……。入れさせて……。下さい……」

美佐子が彼女の耳に楽しげな低い声を吹き込む。

「いいわよ、入れても……。でもこれからはちゃんと断ってからスルのよ」

「はい……」

答えた麻美の陰具を掴む手が大きく動いて、くねりながら振動するバイブレーターを膣穴に埋め込んでいく。

その時の彼女の表情は、惚けた者のように虚ろで、股間から沸き上がる快樂を貪るものそれであった。

桜色をした繊細な肉壁が黒いゴムによって押し分けられ、奥から押し出されて滲んだ愛液が太股に短い糸を引く。

「ああ……」

麻美が喘ぐ。

そんな彼女に嘲笑混じりの笑いを向けた美佐子が、彼女の股間の陰具を掴んで更に押し上げ、その全体を中に埋め込んだ。

そんな様子を運転席から見詰めていた平尾が、手に持っているコントロールボックスのスイッチ

チを切る。

「あっ！」

急に消えた陰具のくねりと振動に、麻美が落胆の声を上げた。

「イヤ……。」

もどかしげに腰を振る彼女の太股に、平尾がダッシュボードから取り出したガムテープで、陰具のコントロールボックスを貼り付けた。

「ほら、こうしてスカートで隠せば、外からは見えないだろう。明日、学校に来るときも、そいつを穴の中に入れてくるんだぜ。分かったか、麻美？」

「ああ……。」

麻美が助手席に座こんだとき、埋め込まれたた膣内の陰具がくねり、くすぶったままの快樂が刺激された。

「あっ……。」

「何を一人で悶えているのよ、返事はどうしたの？」

「……は、はい。分かりました……。」

ようやく答えた彼女に、美佐子と平尾が冷笑を向けた。

「忘れるなよ、忘れたら今日より酷く嬲ってやるからな……。」

平尾がサイドミラー越しに彼女に言い、そして車のエンジンをかけた。

\*

麻美の自宅の前に車が止まった。

「さあ、到着だ」

平尾が差し出した通学鞆を受け取った麻美が車のドアを開けようとしたとき、美佐子が声をかけた。

「ちよつと待って」

美佐子は一瞬淫らな笑いを浮べて、彼女のスカートの中にすばやく手を差し込んだ。バイブレーターのコントロールボックスをまさぐり、スイッチを入れる。

「うっ……。」

膣に挿入されているバイブレーターが蠢き、彼女が思わずシートの上に屈み込む。恨めし気な視線を向けた彼女を見る美佐子が、冷たく微笑み、言った。

「行ってもいいわよ。フフ……、おやすみ、麻美。また明日ね」

麻美が、彼女を責め立てる陰具の感触を味わいながら、震えがちな足で車を降りる。

自宅の玄関に消えていく彼女を見詰めていた平尾がぼつりと囁いた。

「また明日、か……。フフツ……。  
車がスタートした。」

以下、次回へ